

平成26年度「海と船の博物館ネットワーク活動」事業完了報告書

事業内容

「海と船の企画展」について、本年度からは日本財団が窓口となっていた法人格を持つ団体や任意団体等についても当館において申請を受け付けるよう窓口の一本化を行い、併せて支援対象費目についても全ての費目を対象とする形で事業を実施した。

窓口一本化の初年度として、全国41か所の博物館、水族館等が開催する、海や船に関わる41の企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示や付帯事業を通して海洋及び海事知識の普及啓発を図った。

また、事業の抜本の見直しを目的としたブランディングを行い、本事業の趣旨や目的、実施手段などについては「社会教育における海洋教育の推進」の視点から調整を行い、平成27年度から事業名を新たに「海の学び ミュージアムサポート」として実施することとし、ロゴマークやWEBページも新たに作成した。

ブランディングにより新たに作成したWEBページでは、見直し後の本事業の趣旨や目的を明記した上で、新規サポートプログラム内容の告知や募集を行うと共に、決定したサポート事業を広く公開し、今後の社会教育における海洋教育実践事例アーカイブのための基盤を整備した。

1. 「海と船の企画展」への支援（申請45団体46企画展、支援実施：41団体41企画展）

①名 称：平成26年度企画展示「魚米之郷―太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし―」

主 催 者：滋賀県立琵琶湖博物館

開催時期：平成26年7月19日～平成26年11月24日

場 所：滋賀県立琵琶湖博物館

内 容：東アジアにおける湖沼のつながりを探り、農・漁・水を通じて湖との暮らしのあり方を見つめなおしながら湖の環境保全へのヒントを探った。自然と人間が絡み合う水田などの水辺での環境を事例に、東アジア社会における湖沼環境の保全を考える際の方策を得ることを目指し、「湖と人間」をテーマにそのヒントを発信した。また、関連行事として企画展時解説ツアーに加えてコンサートやオリジナル料理、関連講演会なども行い、展示学習シート配布も行った。

②名 称：企画展「海のごちそう、いただきます！魚食のいま・むかし」

主 催 者：公益財団法人東海水産科学協会

開催時期：平成26年7月19日～11月30日

場 所：海の博物館

内 容：海に囲まれた日本では古来、魚介類、海藻類が貴重な栄養源であるとともに、信仰など多様な生活習慣と深く結びつくことで、独自の文化を形成してきました。しかし近年、様々な理由から海産物の消費量が大きく減少し、魚離れが進んでいます。そこで、海産物利用の歴史と現状を概観することにより、ながく海の恩恵を受けてきた

日本の食文化を見直し、魚食の拡大に寄与する事を目的として実施した。附属事業として、お魚料理教室、子どもお魚料理チャレンジ、チリメンモンスター教室などを実施した。

③名 称：平成26年度 春季特別展「海路—海港都市の発展とキリスト教受容のかたち—」

主 催 者：西南学院大学博物館

開催時期：平成26年6月16日～12月19日

場 所：①西南学院大学博物館：平成26年6月16日～ 8月30日

②梅光学院大学博物館：平成26年 9月 4日～10月18日

③神戸大学海事博物館：平成26年11月 8日～12月19日

内 容：本事業は、神戸から下関、博多まで通じる“海路”をテーマに、文物を通じた文化的発展と都市成長について取り上げた。瀬戸内海から博多、玄界灘へと続く、海のみちを介してどのような文化的流通があったのかを紹介するとともに、我々が抱えている江戸時代日本の姿を再認識するものとして実施した。なお、サブテーマであるキリスト教という目に見えないものが、“カタチ”として、どのようにあらわれたのかを“モノ”を通じて取り上げた。

④名 称：海洋回廊—海の道“薩摩”

主 催 者：南さつま市

開催時期：平成26年10月18日～平成27年1月25日

場 所：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

内 容：海の道「海洋回廊」をキーワードに、薩南諸島含む薩摩地域の対外交流史を紹介することで、当該地域が担ってきたわが国のシーレーンとしての役割、薩南諸島の島々が持つ重要性について、南薩摩各地の遺跡や坊津町泊の海岸、十島村平島などで発見された海外産の出土品などを基に、解説パネルと共に関連の出土遺物や新発見の薩摩塔、金魚等を展示し、広く一般市民に向け紹介を行った。また、近隣学校の土曜授業とタイアップにより、海を渡り伝来したサツマイモ等の食べ比べなども実施した。

⑤名 称：平成26年度マリンサイエンスギャラリー「クラゲ展」

主 催 者：千葉県立中央博物館

開催時期：平成27年2月14日～3月10日

※3月11日～5月6日までは自主開催

場 所：千葉県立中央博物館分館海の博物館

内 容：本事業は、(1)クラゲをとおして海に生きる生物の不思議を感じてもらふこと、(2)クラゲの種類や生き方の多様性について、の理解を深める、(3)クラゲと海の環境、人との関わりについて学ぶ、とともに、来場者に、クラゲを入口として広く海洋についての興味を深めてもらうことを目的とし、以下の展示を行った。

「1. クラゲという生きもの」では、クラゲの分類、生活史などを紹介した。「2. 千葉県のクラゲ」では、水槽での生体展示および写真パネルで紹介した。「3. クラゲと人とのかかわり」では、社会問題になっているクラゲ等について紹介した。「4. クラゲを観察しよう」では、クラゲの採集の方法や飼い方などを紹介した。

「クラゲトピック①-④」では、クラゲの興味深い話題を4つのトピックで紹介した。

- ⑥名 称：第20回函館の「海と港」児童絵画展
主 催 者：公益財団法人函館市文化・スポーツ振興財団
開催時期：平成26年7月20日～8月17日
場 所：函館市北洋資料館
内 容：函館の「海と港」児童絵画展は、第20回目の節目となる年を迎えるにあたり、毎年開催している児童を対象とした「絵画展」とともに、今回の開催では関連した特別企画として「親子特別写生会絵画教室」、「函館海上保安部パネル展」を合わせて開催した。この事業を展開するにあたり、例年、函館市や函館市教育委員会、各報道機関に共催や後援を依頼しているが、今年は新たに民間団体である函館市漁業協同組合、函館海上保安部にも協力をいただき、20回目にふさわしい記念開催を実現することが出来た。
- ⑦名 称：主に盲学校、特別支援学校、山間部の学校を対象とした触れる巡回水族館
主 催 者：株式会社ネイチャーネットワーク（すさみ海立エビとカニの水族館）
開催時期：平成26年3月1日～平成27年3月22日
場 所：和歌山県近郊の学校、幼稚園、保育園、図書館、福祉センター等、合計18カ所
内 容：盲学校や特別支援学校、山間部・遠隔地の学校など、普段気軽にエビとカニの水族館へ来られない子供たちのために「触れる巡回水族館」を実施。2tトラックに組み立て式のプールと水槽と共に海水や生物を積み込み、要請のあった学校へミニ水族館を出前した。場所によっては他館と連携し、共同事業として実施する会場もあった。
- ⑧名 称：平成26年度夏の企画展「海のふしぎをサイエンス」
主 催 者：公益財団法人広島市文化財団
開催時期：平成26年7月26日～8月24日
場 所：広島市江波山気象館
内 容：津波や高潮など波の発生のしくみを観察装置や実験装置で紹介し、科学に対する興味や関心を高めるとともに、災害から身を守る意識の向上を図ることを目的に以下の内容で実施した。
○知ろう 観察しよう 津波：大型の装置により津波の観察を通して、津波の威力について理解を深め、津波のしくみを紹介した。
○台風が来るとどうなるの：「高潮」の吹き寄せ効果で海上から海岸に向けて風が吹き続けると海面が上昇する現象を実験紹介。吸い上げる力で台風などの低気圧が接近すると、気圧が下がり海面が上昇する現象を紹介。
○海水浴で気をつけて：海岸の波打ち際から沖合に向かってできる潮の流れ（離岸流）について実験紹介。
○渦ができる！：鳴門の渦ができるしくみについて紹介。
○遊びのひろば：水圧実験装置などの展示
○関連イベント：サイエンスショー「水のミラクル大実験」

- ⑨名 称：企画展「タコとタコツボ～タコと人との知恵くらべ」
主 催 者：きしわだ自然資料館
開催時期：平成26年6月1日～7月21日
場 所：きしわだ自然資料館、岸和田市、和歌山市、大阪府内
内 容：身近な生物「タコ」のなかまの生態について、タコの生態展示と、タコとともに生きる生物のタッチプールで紹介した。現在行われている「タコツボ漁」の基本的な仕組みや、日本全国のタコツボの計上の違いを比較した。また、日本のタコツボ漁起源の地とされる大阪湾で行われているタコツボ漁の弥生時代から近世までの変遷を紹介した。付帯事業として、チリモン探し、貝殻クラフト、講演会、タコツボ作り等の多種にわたる付帯事業を実施した。
- ⑩名 称：里見氏安房国替400年特別展「里見氏の遺産・城下町館山―東京湾の湊町―」
主 催 者：館山市立博物館
開催時期：平成26年9月6日～10月19日
場 所：館山市立博物館
内 容：東京湾の出入口に位置する館山が、戦国時代末に当地を支配した房総里見氏によって、海上交通の拠点として開発された点を紹介した。展覧会・図録では、絵図・地図等のビジュアル資料を活用し、館山が海上交通の要地であることが視覚的に分かる工夫をした。関連事業として、講演会「城下町の歴史―中世から近世へ―」、展示解説会、見学会「わたしの町の歴史探訪―館山城下町―」などを行った。
- ⑪名 称：平成26年度特別展示「海―生命の歴史―～海が私たちに残したもの～」展
主 催 者：笠岡市立カブトガニ博物館
開催時期：平成26年 7月19日 ～ 平成26年 9月30日
場 所：笠岡市立カブトガニ博物館
内 容：海は生命の源といわれ、長い年月をかけて様々な生命が誕生してきた。進化することで次の時代へと生命を引継いだもの、進化することなく絶滅したものたち。
今回の特別展では、海に的を絞り、生命が誕生した初期の時代から、古生代、中生代、新生代へと時代の移り変わりによって生命がいかに進化し多様化していったかを子ども達にもわかりやすく解説した。関連事業として、カブトガニ幼生放流事業、自然体験学習「海辺の学校」、カブトガニ保護少年団夏期研修会、カブトガニ繁殖地清掃活動、市内外8カ所への出前講座の開催などを行った。
- ⑫名 称：平成26年度企画展「恐竜 in ごとう 2014～発見！海からはじまる生命の歴史～」
主 催 者：五島観光歴史資料館
開催時期：平成26年10月4日～11月9日
場 所：五島観光歴史資料館
内 容：以下のような展示構成にて、海や海洋生物への興味喚起を行った。

- 生命の誕生～すべては海から始まった～
- 古代の海をのぞいてみよう
- 大型爬虫類が歩いた世界
- 九州で見つかった化石
- 五島はかつて湖の底だった～五島市の海岸で発掘された化石～
- 五島の現生貝類

⑬名 称：平成26年度今治市村上水軍博物館開館10周年記念特別展
「海のスペシャリスト—小説『村上海賊の娘』にみる“海賊働き”
とは—」

主 催 者：今治市

開催時期：平成26年7月19日～9月23日

場 所：今治市村上水軍博物館

内 容：海戦のプロとして名を馳せた村上水軍。その一方で、平時には海の安全や交易・流通を担う重要な役割を果たした。本屋大賞2014受賞作品『村上海賊の娘』で著者の和田竜氏は、こうした村上海賊の海上活動を“海賊働き”と称した。当展示では、この“海賊働き”にスポットをあてることで、マイナスイメージで語られることの多かった中世の「海賊」の正しい歴史理解を促し、海から見た歴史学習の重要性を発信することを目的とした展覧会であった。

⑭名 称：平成26年度 地域連携巡回展「通運丸で結ばれた関宿・野田・流山—海運へのターニングポイント—」

主 催 者：千葉県立関宿城博物館

開催時期：①千葉県立関宿城博物館：平成26年10月7日～11月30日

②流山市立博物館：平成26年12月16日～平成27年2月15日

場 所：①千葉県立関宿城博物館

②流山市立博物館

内 容：明治10年（1877）から昭和9年（1934）にかけて利根川・江戸川を中心に運航した通運丸をとおして、当時の寄航場の様子を紹介した。特に、2館が所在する関宿・野田・流山の寄航場の様子を紹介した。また、鉄道や自動車の普及、度重なる自然災害の影響により、河川交通が衰退していく中、船舶の運航は海洋中心となり、大型貨物船などによる海上輸送が日本の産業発展に貢献していることを取り上げた。

⑮名 称：仙台北下への肴の道と和船の魅力～江戸時代の塩釜港～

主 催 者：特定非営利活動法人NPOみなとしほがま

開催時期：平成27年3月8日～3月31日

場 所：海商の館 亀井邸

内 容：奈良時代から栄えた塩竈は幕末まで仙台への米以外の荷揚げ港として繁栄しました。時代ごとによって変わっていったその歴史や文化について、パネル展示や地形ジオラマにより紹介を行うと共に、江戸から仙台藩への重要な輸送手段であった千石船の魅力について、江戸湊の船着き場などを再現した茶船や作業船、軍船などを展示し、製作者のミニトークを交えながら和船の魅力を紹介した。

⑯名 称：企画展「富士山の足元 駿河湾 海の生きもの大研究！」
主 催 者：東海大学海洋科学博物館
開催時期：①平成26年10月1日～平成27年2月28日
②平成26年7月26日～8月31日
場 所：東海大学海洋科学博物館
内 容：「駿河湾 季節の生きもの」では、夏秋水槽と冬春水槽を設置し、その季節にみる事のできる海洋生物を飼育展示した。夏秋水槽ではその名の通り、夏秋に見られ、小さくて可愛らしい暖かい海に棲む魚類を展示した。「ふれてみて サメと海の生きものたち」では、タッチプールにサメ、エイ類を展示した。参加者はこれらの生物に触るために水槽の中に入り、解説スタッフから触り方や注意事項のレクチャーを受けた後、生物に直接接触した。

⑰名 称：平成26年度 萩博物館特別展 「海を拓いた萩の人々」
主 催 者：萩博物館
開催時期：平成26年12月6日～平成27年4月5日
場 所：萩博物館
内 容：萩地域の人々が日本の漁業近代化を牽引し、広く海を拓いてきたことを、市民とともに再発見する展示、及び関連事業を開催した。展示については、①海を拓いた萩の船 ②日本漁業の近代化の先駆け（近代捕鯨） ③日本漁業の近代化（トロール漁業） ④海の開拓者（壱岐対馬・黄海・東シナ海への出漁） ⑤海の開拓者（クルマエビ養殖） ⑥恵みの海の行方 といった柱を設け、関連の資料を集積して、グラフィックパネルや映像資料を交えた分かりやすいものとする。県内博物館施設（下関市豊北歴史民俗資料館）と連携し、同時期に海洋関連企画展（「鯨の民～その信仰と祈り」と「海を拓いた萩の人々」）を開催した。関連行事については、市民を対象とした展示を深める講座（①海を拓いた萩の船 ②漁業近代化の先駆け ③海を拓いた萩の人々）や、小学生などを対象とした博物館内授業・地域出前講座を実施した。市民参加を得て展示準備を進め、協働で地域資源の再発見と資料の市民共有財産化を図った。

⑱名 称：特別展「陸にあがった海軍一連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争一」
主 催 者：神奈川県立歴史博物館
開催時期：平成27年1月31日～3月22日
場 所：神奈川県立歴史博物館
内 容：太平洋戦争期、神奈川県域には旧日本軍により多くの軍事施設が構築、使用された。それらの一部は現在でも残存しているが、横浜市港北区日吉に所在する連合艦隊司令部地下壕は、当時の海軍の中枢部隊が実際に使用した空間が現在にも残っており、非常に貴重な遺構といえる。本展では、近年実施された測量、発掘等の調査成果に基づき、当遺構を中心とする日吉一帯の戦争遺跡を紹介した。連合艦隊司令部地下壕では、太平洋戦争末期、零戦での神風特別攻撃隊や戦艦大和の沖縄出撃といった悲劇的な作戦が多く考案、指令された。本展では、そういった頭脳の中枢としての日吉の戦争遺跡と、前線の戦場とのつながりも紹介した。

⑱名 称：連続企画展「海と洋を結ぶ湖」
主 催 者：公益財団法人 滋賀県文化財保護協会
開催時期：平成26年6月3日～12月27日
場 所：滋賀立安土城考古博物館
内 容：「海と洋を結ぶ湖」をテーマに、4回の企画展、4回の講座を実施した。

①企画展1「海を渡り来た人々」、講 座1「海を渡り来た人々」
古墳時代の外洋航海に使用された船をモデルにした船形埴輪、朝鮮半島から渡来した人々が携えた土器、またその影響下に作られた土器を展示し、講座では文献史料や考古資料からみた琵琶湖周辺に定着した渡来人の動向について解説した。

②企画展2「命を支えた海の幸」、講 座2「日本古代の鮭と製法」
人の生命維持に不可欠な塩について、古墳～奈良時代の近江の塩の供給地である若狭湾と大阪湾の資料、関連する県内の出土資料を展示し、講座ではその製法上、塩が不可欠な琵琶湖の伝統食である「ふなずし」の歴史を解説した。

③企画展3「海の船・湖の船」、講 座3「船が運んだ笏谷石」
戦国時代、越前から日本海開運を通して琵琶湖沿岸に運ばれた笏谷石製品、笏谷石の運搬に使われた日本海の北国船、琵琶湖の丸子船を展示し、講座では琵琶湖沿岸にもたらされた戦国時代の笏谷石製品の特徴や流通の様子について解説した。

④企画展4「海を渡る財宝」、講 座4「海を渡る財宝」
平安時代後期から室町時代の日宋貿易や日明貿易によって琵琶湖周辺に輸入された陶磁器と国産模倣品、銅銭を展示し、講座では日宋貿易で輸入された陶磁器と銅銭が琵琶湖周辺でどのように受容され使用されていたかを出土資料を中心に解説した。

⑳名 称：企画展「闇夜の動物たち」
主 催 者：群馬県立自然史博物館
開催時期：平成26年10月4日～11月30日
場 所：群馬県立自然史博物館
内 容：「夜行性」動物がもつ特徴的な「感覚」を来館者自らが疑似体感することで、ヒト以外の動物の生態について理解する場を企画展示室内に創出した。「海」のない群馬県で、深く広がる夜の海の世界を生体展示し、魚類、甲殻類等の多様な生態や発光などの生存戦略について学ぶ場を提供した。また、付帯事業として講演会及び自然教室、提示解説等を行った。

㉑名 称：大黒屋光太夫記念館第10回特別展「漂流・漂着ものがたりー海へ往く者 海から来る者ー」
主 催 者：鈴鹿市
開催時期：平成26年10月25日～12月14日
場 所：大黒屋光太夫記念館
内 容：展示では江戸時代を通じて多発した海難事故により日本から異国へと漂流した者たちと、同じく海難事故によって日本へと漂着した異国人について資料を展示した。「鎖国」していた江戸時代において

も、四方を海に囲まれた日本は、世界とつながっており、断片的ではあるが海を介した異文化交流が行われていたことを紹介した。

関連行事では特別展でとりあげた「漂着」をテーマにワークショップを2回開催した。11/3（月・祝）には、「海岸で漂着物を探して標本箱を作ろう」と題し、鼓ヶ浦海岸および伝統産業会館において、ビーチコーミングと標本箱作りをおこなった。11/29（土）には、「探した漂着物でフォトフレームを作ろう」と題し、若松公民館において工作教室を実施した。また、学芸員による展示解説会を10/25（土）・11/13（木）・11/30（日）に実施した。

②名 称：平成26年度博物館特別展「水中文化遺産～海に沈んだ歴史のカケラ～」

主 催 者：沖縄県立博物館・美術館

開催時期：①平成26年11月8日～平成27年1月18日

②平成27年1月27日～2月22日

場 所：①沖縄県立博物館・美術館

②恩納村博物館

内 容：南西諸島を中心に日本各海域の港や沈没船等から調査された陶磁器等の積荷や船体等を展示した。日本の各海域で発見された様々なイカリ（四爪鉄錨、西欧型鉄錨、碇石）の資料や、科学的根拠に基づいて実物大に復元した中国ジャンク船のイカリや琉球王国の進貢船の木椗（イカリ）を一挙に公開した。また、水中文化遺産の映像や写真のプロが撮影した臨場感溢れる海底遺跡の映像・写真を展示した。最先端の海底調査機器や海底遺跡の調査で実際に使用した水中ロボットを展示した。イカリパズルキット（6種）を製作し体験・学習コーナーとした。県内外の水中文化遺産の専門家を招聘し、水中文化遺産に関するマクロな事例からミクロな事例まで様々な内容で、5回の講演会を開催。マリンスポーツが最も盛んな地域の博物館において、今回製作した成果品を最大に活用したミニ移動展を開催した。

③名 称：開館20周年記念企画展「新茨城風土記－ひとと自然のものがたり－」

主 催 者：ミュージアムパーク茨城県自然博物館

開催時期：平成26年7月12日～11月24日

場 所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館

内 容：茨城県には、190kmに及ぶ海岸線を有し、沖合では親潮と黒潮が会う豊かな海、変化のある地形・地質の上に成り立つ山地、人びとの生活と深いかかわりをもつ里地里山など、多様性に富んだ自然が存在するが、その魅力は県内外に十分に認識されているとはいえない。そこで、開館20周年にあたり、それらの魅力ある自然を人びとの暮らしとのかかわりを中心に紹介し、地域の産業振興や観光促進の一助とした。

④名 称：平成26年度秋季特別展「古墳時代の船と水運」

主 催 者：高槻市教育委員会

開催時期：平成26年10月4日～11月30日

場 所：高槻市立今城塚古代歴史館
内 容：淀川水運との関わりの深い出土品に加え、三重県宝塚1号墳(重文)をはじめとする精巧な船形埴輪や船の絵を描いた埴輪、出土した船材など約40点を展示し、古墳時代の船と水運を王権との関わりを紹介した。関連事業として、講演会やミュージアムトーク、歴史体験講座、埴輪作り体験教室を実施した。

②⑤名 称：特別展「佐久間象山と横浜—海防、開港、そして人間・象山—」
主 催 者：公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
開催時期：平成26年5月31日～7月6日
場 所：横浜市歴史博物館
内 容：佐久間象山の「海防」や「横浜開港」論に関する重要な資料にはくずし字を解読するとともに現代語訳を付し、来館者の理解を促進するようつとめた。海岸防備や神奈川台場を描いた絵図などを展示し、当時の横浜の海と歴史の状況を視覚的に伝えた。海軍の充実や海防を唱えた象山ならではの言葉「海舟書屋」(勝海舟の号の由来ともなった)を書道展の課題の一つに設定した。大人を想定して設定した課題だったが、小・中学生の作品も複数寄せられた。

②⑥名 称：平成26年度 企画展「海のまちと希望の帆船」
主 催 者：宮城県慶長使節船ミュージアム(サン・ファン館)
開催時期：平成26年7月21日～10月26日
場 所：宮城県慶長使節船ミュージアム(サン・ファン館)
内 容：2013年11月のサン・ファン館再開館後初の開催となる企画展であり、①「サン・ファン・パウティスタ」と石巻の人びと②津波をのりこえたサン・ファン・パウティスタ③慶長遣欧使節と慶長大津波という3つのテーマを設定した。「慶長18年(1613)に行われた海外への使節派遣は、貿易によって人や物の流れを作り、震災で傷ついた領土の活性化を図ったのではないか」という慶長使節派遣に込められた意図、復元船建造当時の石巻市民の活動、そして復元船の修復とサン・ファン館の再開の様子を通して、大事業が行われた地元石巻への誇り、困難に負けず勇気と希望を持って未来へ進むことの大切さについて後世に伝えるため、パネル・資料等を用いて展示を行った。

②⑦名 称：企画展「日本の海の玄関 大さん橋物語」
主 催 者：公益財団法人帆船日本丸記念財団
開催時期：平成26年10月4日～11月24日
場 所：横浜みなと博物館
内 容：横浜港大さん橋は、創建以来120年間「日本の海の玄関」として、海外からの物や人、情報、文化の受入口になってきた。企画展では、日本を代表する港湾施設の大さん橋について、図面や資料、写真など約400点の資料で9つのコーナーに分け、海洋土木や海上輸送、国際交流などから、産業や暮らしに欠かせない交易・交通の場としての港を通して、海洋啓発の機会とした。関連行事として、「船に乗って大さん橋を見に行こう！」(参加者19名)や「大さん橋鉄螺旋

杭セミナー」(参加者 40 名)、「記念講演会 大さん橋と横浜」(参加者 72 名)、「フロアガイド」(参加者 54 名)を実施した。

- ⑳名 称：2014年科学技術館 夏の特別展プロジェクト
海と船の企画展「海洋の探査技術と生命の多様性展」
主 催 者：公益財団法人 日本科学技術振興財団
開催時期：平成26年8月9日～8月25日
場 所：科学技術館
内 容：海洋生物および海洋環境と人間社会とのかかわりについて、研究開発の成果を生体や標本展示を通じて紹介した。展示は「豊かな海の環境」「生態の不思議」「海の利用」「豊かな海を支える生き物」の4コーナーで構成した。
・「豊かな海の環境」コーナー：サケガシラ、ミツクリザメ、ラブカ、サツマハオリムシ等深海生物の生体と標本を展示し、深海という環境を生き抜くための生存戦略を紹介した。目玉展示として国際科学振興財団の協力を得て、シーラカンスの稚魚及び卵の標本を展示した。
・「生態の不思議」コーナー：6月にニホンウナギがレッドリストに記載されたことを受け、ウナギの成魚(生体)、ウナギの標本(卵→仔魚→稚魚→クロコ→黄ウナギ)を展示し、ウナギの生態について解説を行った。また、ミドリフグの毒の解明や、ネオンテトラの光による行動生態等を解説した。
・「海の利用」コーナー：フグ、カブトガニ、クラゲ、テングサ、オゴノリ、ヨシキリザメ等さまざまな海洋生物から抽出された成分が食料や医薬品として注目を集めている事を紹介した。
・「豊かな海を支える生き物」コーナー：プランクトンの標本を顕微鏡で観察するコーナーを設け、食物網の中でプランクトンがもつ役割を解説した。
- ㉑名 称：平成26年度 企画展「胸キュン☆サンゴ展 ～私を深海につれてって～」
主 催 者：鳥取県立博物館
開催時期：平成26年7月19日～8月31日
場 所：鳥取県立博物館
内 容：過去から現在にかけてのサンゴや生物礁の変遷を、骨格や化石標本を用いて紹介し、地球環境におけるその重要性を紹介した。また、鳥取の伝統産業であるサンゴ細工など、サンゴの文化的な側面も紹介した。主な展示資料として、サンゴ類骨格標本、サンゴ類化石標本、サンゴ生体の水槽展示、深海調査船、海洋調査機器の展示、鳥取県のサンゴ細工製品等を展示した。
- ㉒名 称：平成26年度黎明館企画特別展 「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～」
主 催 者：鹿児島県歴史資料センター黎明館
開催時期：平成26年9月27日～11月3日
場 所：鹿児島県歴史資料センター黎明館

内 容：企画特別展では、平安時代後期から鎌倉時代、南北朝期に相当する中世前半（11世紀～14世紀前半）の南九州・琉球列島に視点を置き、遺跡及び遺跡出土の貿易陶磁や国内産交易品、当該地域の交易・交渉・支配に関わる歴史史料を手がかりとして、南九州と琉球列島を取り巻く、海洋を舞台としたひと・もの・文化の交流を紹介した。

③①名 称：平成26年度 企画展「土佐湾の深海生物展 ～深海ってどんなところ？～」

主 催 者：公益社団法人 桂浜水族館

開催時期：平成26年11月1日～平成27年1月31日

場 所：桂浜水族館

内 容：高知県では土佐湾で漁獲される深海魚メヒカリ（アオメエソ）・オキウルメ（ニギス）・ヤケド（ハダカイワシ）などが身近に食べられている。その一方で、深海魚であることはあまり知られていない。本企画展では高知県唯一の深海魚漁業の基地「御豊瀬（みませ）」に焦点をあて、深海魚の漁法や料理法のパネル、深海魚を捕る底曳網漁の様子を撮影したDVD映像を混じえて紹介した。また、高知県海上保安部の資料をもとに土佐湾の地理的構造を、高知大学理学部に保管されている深海魚の標本を中心にその研究成果の展示紹介も行った。また、高知県初となるオオグソクムシのタッチングコーナーを設けた。

③②名 称：平成26年度 特別展「八甲田丸就航50周年記念・青函連絡船八甲田丸ー50年のあゆみー」

主 催 者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ

開催時期：平成26年7月1日～10月31日

場 所：青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

内 容：2012年に船内で新たに発見された就航当時の実物資料（航海日誌、図面、時刻表、船内BGMテープ、書籍、運航マニュアル本、各種メンテナンス部品など）約300点の特別展示した。また、元乗組員が撮影した八甲田丸の国鉄青函連絡船運航時代から現在に至るまでの写真50点を特別展示した。

③③名 称：海と船の企画展 海の新幹線・津軽丸型連絡船

主 催 者：特定非営利活動法人 語りつぐ青函連絡船の会

開催時期：①平成26年8月1日～8月31日（摩周丸一般配置図試作品の展示及び工作教室の実施）

②平成26年11月2日～平成27年3月31日（企画展「海の新幹線・津軽丸型連絡船」）

場 所：函館市青函連絡船記念館摩周丸

内 容：摩周丸非公開区画観覧システム（現在立ち入りできない車両甲板、主機室、総括制御室にネットワークカメラを設置し、展示室内から遠隔操作してモニター上で見る）の開発・設置。津軽丸型連絡船の特徴・各部を解説したパネルの制作・展示。摩周丸一般配置図（乗組員スタンバイ図付き）の制作・展示。

③④名 称：名古屋港ポートビル 30 周年記念特別展「ポートビルタイムトラベ
ラーズ ―発見！過去・現在・未来のたからを探せ!!―」

主 催 者：公益財団法人名古屋みなと振興財団

開催時期：平なり 26 年 7 月 19 日～9 月 15 日

場 所：名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ

内 容：「名古屋海洋博物館の過去」：名古屋海洋博物館の 30 年間の年表（過
去の特別展等紹介のパネル）、過去に開催した特別展の模型「客船
模型（飛鳥、ふじ丸、につぼん丸、ぱしふいっくびいなす 計 4 隻）」、
過去に開催した特別展のポスター 10 枚、過去に開催した特別展の
展示物（客船の写真、テレホンカードやキーホルダー等の記念品）
20 点、過去の常設展示物「太古の伊勢湾に生息していた『パレオパ
ラドキシア骨格標本』」にて紹介した。「名古屋海洋博物館の現在」：
博物館で行っている海事普及事業の紹介パネル、定例事業 帆船模
型展より「帆船フランスⅡ」模型、定例事業 ボトルシップの展示
（15 点）、定例事業 南極教室及びオホーツクの流氷展より、来館
者が触れることができる「南極の氷」「オホーツクの流氷」の展示
にて紹介した。「名古屋海洋博物館の未来」：名古屋海洋博物館リニ
ューアル計画の概要を紹介。その他、ワークショップや工作教室を
実施した。

③⑤名 称：平成 26 年度名護博物館企画展「生物の移動展 ～海山こえろ！生
きものたちの大冒険～」

主 催 者：名護博物館

開催時期：平成 26 年 8 月 15 日～9 月 28 日

場 所：名護博物館

内 容：島嶼県である地理的条件から、海洋生物や海流散布を行う植物、渡
りを行う生物との関わりが深い反面、その生態について意外に知ら
れていないことが多い。こうした身近な生物に焦点をあて、生物が
生き残るため獲得した手段「移動」をテーマに、その多様性を紹介
した。身近な生物から海山こえた地球規模のつながりを感じ、人の
くらしと自然との関わりについて考えてもらえるような展示を目
標とした。

③⑥名 称：時遊館 COCCO はしむれ企画展 指宿まるごと博物館Ⅵ 『火
山の恵みと黒潮交流』

主 催 者：指宿市

開催時期：平成 26 年 12 月 24 日～平成 27 年 3 月 1 日

場 所：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ

内 容：今回の企画展では、黒潮によって行われたさまざまな黒潮交流に
迫った。黒潮交流によって運ばれた品々は、火山の恵みを中心に展
示構成を行った。指宿には火山の恵みを用いて作られた縄文土器や
薩摩焼をはじめ、石造物や石堀の材料となった山川石や池田石、さ
らに金・銀などの鉱物が、広い海洋へ運び出され南西諸島や沖縄へ
運ばれた。黒潮交流で広い地域に運ばれたこれら火山の恵みを紹介
することで、指宿市を含めた南薩地域が「火山銀座」と呼ばれるほ

ど火山が多く、広い海洋に囲まれていることを来館者に気付かせ、興味を深めさせる機会とした。また、企画展の関連行事として、講座（2回開催）と講演会（2回開催）を行った。

③7名 称：平成26年度企画展「海上に浮かぶ企画展 須磨ドルフィンコースト」

主催者：神戸市立須磨海浜水族園

開催時期：平成26年7月1日～8月31日

場所：神戸市立須磨海浜水族園

内容：須磨ドルフィンコースト開催敷地内（海面）に、「日本初!! 海上に浮かぶ企画展」という触込みを掲げ、海上に浮かぶ浮島を製作し、須磨ドルフィンコーストの取り組み概要やイルカの生態、イルカ个体紹介をパネル展示で行った。「須磨ドルフィンコースト」プロジェクトは、須磨海岸海域においてイルカを自由に遊泳させることによる須磨地域の活性化、環境教育の効果、イルカの飼育環境の向上などへの効果検証を目的としたもの。昨年の実験結果を踏まえ、海上に浮かぶ企画展、海でのイルカふれあい体験など新たな取り組みを実施するものである。浮島会場でイルカを間近で観察できるデッキを設け、本プロジェクトの説明やイルカの生態、人間の生活が海洋生物に及ぼす影響（ゴミ問題等）を企画展会場内で解説ツアーを実施した。

関連行事では「須磨いるかの日（須磨海岸クリーン作戦）」として市民と共に須磨海岸クリーン作戦を実施し、ゴミ拾いを行った。「音とイルカのハーモニースペシャルトワイライトライブ2014」では、音楽ライブとイルカライブを共演させた須磨海岸環境保全活動チャリティ企画を実施した。収益の一部は、須磨海岸を美しくする運動推進協議会へ寄付した。

③8名 称：北九州市立自然史・歴史博物館 平成26年度夏の特別展「THE モンスター展」

主催者：THE モンスター展 実行委員会

開催時期：平成26年7月11日～9月23日

場所：北九州市立自然史・歴史博物館

内容：史上最大の海生爬虫類シオニサウルス（全長21メートル）の頭骨復元を世界初公開した。絶滅クジラ類バシロサウルスと北九州市産のクジラ類化石2つの全身復元骨格標本を展示した。北九州市で捕獲された全長4.3メートルの深海魚リュウグウノツカイの剥製を展示した。その他多くの海の生物、空や陸の生物の絶滅種から現生種の標本約100点を展示した。関連行事として、閉館後にナイトミュージアムを1回（7月25日・金）に実施し401人の参加者が夜の特別展及び当館常設展を見学した。閉館後にファミリーコンサートを1回（8月24日・日）に実施し120人が参加した。特別展内でギャラリートークを3回（7月26日・土、8月2日・土、8月23日・土）実施した。連続特別講座を2回（8月4日・月と7日・木）実施し延べ24人が参加した。

③9名 称：特別展「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて～」

主 催 者：京都大学総合博物館

開催時期：平なり26年12月10日～平成27年1月25日

場 所：京都大学総合博物館

内 容：「海」と「探究活動」をテーマに全国のべ47の小中高校から協力・参加を頂き、17実践について展示をした。児童・生徒作品と探究活動の軌跡が分かるような資料を展示し、展示期間中も全国に具体例を募り、「私たちの探究」コーナーにて会場内の大型モニターで展示した。さらに、子どもたちの「探究活動」への動機付けをめざして、京都大学総合博物館で行われている事例として「京大子ども博物館」（子どもたち向けの行事）や、「教職実習演習」（これから教師になる学生向けの「探究活動」中心の演習）についてもブースで展示した。協力校：のべ41校、展示「私たちの探究」参加校：のべ6校との協働で展示を作成した。

④名 称：船舶模型から学ぶ人・海・船～海運の過去・現在・未来～

主 催 者：国立大学法人神戸大学

開催時期：平成26年7月18日～10月31日

場 所：神戸大学大学院海事科学研究科 海事博物館

内 容：四方を海に囲まれている日本は、人・物資等の輸送に船は必須の手段である。ここ神戸でも様々な種類の船舶を目にすることが出来るが、実際の船舶は限られた場所ではしか目にすることができず、またそれらの船が過去から現在にわたり実際にどのような用途で利用されているかを把握し、詳細を理解することは一般には困難である。そこで、次世代を担う若年層から一般の方々を対象に、当館が所蔵する大小さまざまな船舶模型や常設展示物を通じて海事の啓発とともに海運の重要性についてより一層の理解を図り、船を身近なものにして海運の変遷や人と海と船のつながりを理解して頂いた。

④名 称：海と船の企画展「古代の海と恐竜・ほ乳類」

主 催 者：柿ビカリア会

開催時期：平成26年3月21日～5月6日

場 所：なぎビカリアミュージアム

内 容：三葉虫やアンモナイト等、岡山理科大学及び林原科学博物館所有の化石30点以上を展示した。関連行事では、4月20日（日）午前岡山理科大学研究員 實吉玄貴氏による「古代の海と恐竜・海竜」を実施し、午後からは岡山理科大学教授 西戸裕嗣先生による「古代の海と三葉虫・アンモナイト」と題した記念講演会を実施。また、その日に併せて、岡山理科大学学生等の指導により、化石のレプリカ作りを行った。

2. 企画展支援館の研修会の開催【中止】

本事業の抜本的な見直しに際してブランディングを実施する必要があり、ブランディング及び事業の抜本的見直しが終了しなければ、本研修会の開催意義が大きく損なわれることから開催を中止することとした。（事業変更承認済み）

3. 博物館ネットワークの構築、運用

インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」専用WEBサイトにおいて、事業内容と「海と船の企画展」募集関連情報の公開を行った。

また、事業の抜本的見直しに伴うブランディングによって「海の学び ミュージアムサポート」事業WEBページを新たに作成し、見直し後の本事業の趣旨や目的、新規サポートプログラム内容の告知や募集を行うと共に、決定したサポート事業を広く公開し、今後の社会教育における海洋教育実践事例アーカイブのための基盤を整備した。

4. 事業の抜本的見直しに伴うブランディング【新規実施】

本事業の抜本的見直しを目的としたブランディングを行い、本事業の趣旨や目的、実施手段などについて、「社会教育における海洋教育の推進」の視点から調整を行い、平成27年度から事業名を新たに「海の学び ミュージアムサポート」として実施することとし、ロゴマークやWEBページも新たに作成した。(事業変更承認済み)

事業目標の達成状況

1. 「海と船の企画展」への支援

実施41企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性を活かした企画展を通して、海洋及び海事知識の啓発を広く図ることができた。

「海と船の企画展」入場者数各館合計953,833人

①主催者：滋賀県立琵琶湖博物館

入場者数：37,227人

成果：入場者数は37,000人を超え、過去に実施した船をテーマとした企画展示を大きく上回り、難しいタイトル名や縁遠いフィールドを取り上げたにも関わらず多くの人々にご観覧頂けた。また、来館者には大変好評であったこともアンケートによって裏付けられ、後ろ向きの意見などは全く聞く事がなかった。さらに遠足などによる小学生団体の入場機会が多く、明日を担う若い世代にも多く観覧頂き、湖や水環境への興味を持って頂いたことは特筆すべきことであった。

②主催者：公益財団法人東海水産科学協会

入場者数：14,313人

成果：日本人と魚食の長きにわたる関わりを表現するため、各時代の特徴的なトピックについて、絵図や写真、模型類を積極的に利用することにより、視覚的に分かり易く示すことが出来た。タイ、アワビ、鰹節など各魚種や加工品、特定の時代の魚食について、通史的にかつ歴史・民俗・現代社会を含めて総合的な情報発信がされることは、一部の書籍を除いて殆ど無い。その点で、栄養を摂取する手段としてだけではなく、信仰・言語など多様な面で日本人の生活に根差した「文化としての魚食」の姿を発信した点は意義深い物であった。

③主 催 者：西南学院大学博物館

入場者数：5, 550人

<内訳>

①西南学院大学博物館：3, 250人

②梅光学院大学博物館：1, 500人

③神戸大学海事博物館：800人

成 果：今回のテーマは“海路”ということから、神戸大学や神戸市立博物館、梅光学院大学、福岡市埋蔵文化財センターからの協力を得て、充実した展示内容となった。博物館として、“モノ”を通じた教育をいかに行っていくのか。それにあたって、効果的な教育プログラムを遂行できるのかが課題だったが、本事業を通じて企画者の発信したい内容を紹介することが出来たと共に、来館者アンケートを確認しても好意的な声が寄せられていたことから、社会貢献、地域貢献にも一役を担えたものと考えられる。また、ワークショップでも予想以上の参加者がおり、次世代の博物館教育にも寄与することができた。

④主 催 者：南さつま市（南さつま市坊津歴史資料センター輝津館）

入場者数：2, 123人

成 果：海の道「海洋回廊」をキーワードに、薩南諸島含む薩摩地域の対外交流史を紹介することで、当該地域が担ってきたわが国のシーレーンとしての役割、薩南諸島の島々が持つ重要性について、広く一般市民の認識向上を図る機会となった。また、企画展開催にかかる新聞報道等もなされるなど、広く一般への普及啓発が図られた。また、海が育てた郷土の歴史について地域の子ども達が進む機会として、コミュニティー・スクール制、土曜授業を導入した坊津学園との連携・タイアップ事業を展開し、海洋教育普及、地域アイデンティティの創出を図るための坊津学園4年生による展示品（海岸採集陶磁器）キャプションづくり、坊津学園内での出張展示など、海に育まれた坊津の歴史・文化に対して子ども達が興味関心を深める絶好の機会となり、海洋教育普及、地域アイデンティティの創出が図られた。

⑤主 催 者：千葉県立中央博物館（千葉県立中央博物館分館海の博物館）

入場者数：5, 852人

成 果：自主開催期間（実開催日数71日間）を含めた入場者数1万6千人を目標とし、1日あたりの入場者数平均は225人であるが、今回会期3月10日までの入場者数は5852人（279人/日）であり、入場者数目標値の124%の達成状況となった。

⑥主 催 者：公益財団法人函館市文化・スポーツ振興財団（函館市北洋資料館）

入場者数：2, 581人

<内訳>

①第20回函館の「海と港」児童絵画展：985人

②親子特別写生会絵画教室：1, 596人

成 果：この事業を通して、次世代を担う子供達が、函館の「海と港」の歴史や現況、海洋についての知識に興味関心をもってもらうこと、ま

た海洋についての知識を高め、安全ルールなどをしっかりと認識してもらおうこと、そして豊かな海を引き継いでいく意識をもってもらうこと、この3点を目標に事業を展開し、海洋についての興味関心を持っていただく機会と海の安全について見つめ直していただく機会を設けることが出来たと推察する。目標の来館者3200人には達することができなかったが、事業の参加者と来館者には、海洋について多くのアプローチが出来たと考える。

⑦主 催 者：株式会社ネイチャーネットワーク（すさみ海立エビとカニの水族館）

入場者数：19, 217人

成 果：当初10校ほどの開催を目標としていたが、予想を大きく上回り、教育機関からの要請だけでも14校（幼稚園・保育園6園、小学校6校、支援学校2校）から依頼があり、その他地域のお祭りなどを合わせて全18カ所での開催となった。5カ所においては和歌山県立自然博物館と共催とし、通常の生物展示に加えて自然博物館の漁具やサメの歯等のはく製展示を行うことにより、より深く海に関する理解を深める機会を提供できた。

⑧主 催 者：公益財団法人広島市文化財団（広島市江波山気象館）

入場者数：10, 683人

成 果：期間中の目標入館者数8,000人（達成率134%）となり、昨年度以上の入館者があった。その要因は、

- ① 津波の様子を目前で体験できる装置は、他に例がなく、来館者の関心が高かったこと。
- ② 展示の多くが、さわる・ためす・体験するなど、子どもから大人まで興味を持ってもらうことができる展示であったこと。
- ③ 期間を通じて天候が不順であったが、雨天でも楽しめる施設として来館が多くあったこと。
- ④ 全国的にも雨の日が多く、災害などが各地で発生したこともあり、気象について関心が高かったこと。

このような背景が、今回の企画展期間中の入館者増につながったのではないかと考えられる。

⑨主 催 者：きしわだ自然資料館

入場者数：3, 507人

成 果：目標入場者数1,600名に対し、倍以上の入場者となった。身近で親しみやすい内容だったためか、新聞社やテレビ局などに多数取り上げられ、それを見て足を運ばれた方が多かった。関連行事も定員以上の申し込みがあったものが多かったため、回数を増やして対応した。今回は自然史的な内容のみならず、人文的な側面の多い展示であったため、ふだん来館することが少ない客層の来館も多かったと思われる。

⑩主 催 者：館山市立博物館

入場者数：6, 729人

成 果：(1)展覧会の入館者数は目標10,000人に対し6,729人とどまった。

- (2)講演会の参加者数は、目標 80 人のところ 52 人とどまった。
(3)展示解説会 (2 回実施) の参加者数は、目標 40 人のところ、2 回合わせてのべ 73 人の参加があり、目標を大幅に上回った。
(4)見学会 (歴史探訪) の参加者数は、目標 80 人のところ 36 人とどまった。

原因・課題としては、全体的に入館者・参加者数が目標よりも少なかった。この点については、展示内容や広報の工夫のほか、開催時期の選定も検討すべき課題である。見学会は天候不良によって 2 回延期し、3 回目も少雨の中の実施であった。そのため事前申込者よりも実際の参加者が大幅に減少した。

⑪主 催 者：笠岡市立カブトガニ博物館

入場者数：20,137人

成 果：目標入場者数：18,000人 のところ、期間中20,137人 (111.8%) の入館があった。

目標として、

1. 海は生命の源であり海の環境保全の重要性を理解してもらう。
2. カブトガニが生き抜いてきた海への理解を深めてもらう。
3. カブトガニは2億年も生き抜いた貴重な生き物であることを理解してもらう。
4. 人間は自然と共生していることを学んでもらう。

特別展示及び付帯行事を通じて、1から4の目標を入館者、参加者に普及啓発し、海と自然の大切さを学習してもらうことができた。

⑫主 催 者：五島観光歴史資料館

入場者数：2,742人

成 果：当初の目標は2,500名に設定していたが、オープン初日を含め2週連続で週末の台風にみまわれ序盤の集客に苦しんだ。また長崎国体の日程に合わせて会期を設定したが、国体関係者を含む観光客の来館は当初の見込みと違いほとんどなかった。しかし会期中盤以降は広報の効果もあらわれ、終盤の3連休に開催した体験学習講座での集客もあり、最終的な入館者数は2,742名で、対目標入館者割合は108%となった。これは昨年度同一期間の1,377名と比べると約200%の増となっており、自館開催の特別展示と比べ、大きな集客効果があったと考えられる。

⑬主 催 者：今治市 (今治市村上水軍博物館)

入場者数：21,223人

成 果：目標来場者数10,000人に対し、約2.1倍の21,223人の来場者があった。一日平均366人であり、村上水軍博物館において、過去最高の来場者数であった。博覧会「瀬戸内しまのわ2014」開催期間、夏休み期間に開催を行い、子供向けパンフレットや解説パネルを設置したため、全国規模の観光客への情報発信、地域の児童・生徒の地域学習において大きな効果が得られた。また小説や映画などを海の歴史学習への入口としたことで、専門家や歴史ファン

のみならず、幅広い世代や客層の利用者が増加したことは大きな成果であった。

⑭主催者：千葉県立関宿城博物館

入場者数：17,494人

<内訳>

①千葉県立関宿城博物館：13,940人

②流山市立博物館：3,554人

成果：千葉県立関宿城博物館の入場者数が前年度よりも増加したのは、過去6年間のアンケート調査を分析し、来館が期待できる市町村を中心にポスター・チラシを配布した効果と思われる。しかし、目標入場者数には及ばなかったため、さらにポスター・チラシの広報先を検討したり、ホームページの充実を図る必要がある。関連行事として実施した講演会の参加人数が、定員の約5割下回った。その原因は広報媒介がチラシだけだったことと、当日受付なので事前の参加人数が把握できず、広報の強化を図れなかったことにあると考えられる。今後は事前に参加人数を把握し、広報の強化策として新聞社などの報道機関を有効活用する必要がある。

⑮主催者：特定非営利活動法人NPOみなとしほがま（海商の館 亀井邸）

入場者数：1,082名

成果：事情により会期短縮となったため、当初目標入場者数は約半分にとどまってしまった。しかし来場者からは、塩竈が仙台の食や経済の重要な港であったことなど、これまであまり語られなかった史実が大変勉強になったとの声や、塩竈街道の古写真を観覧し、塩竈や仙台の昔の思い出話が出るなど大変好評を得た。和船細工の展示については、新聞報道の翌日には150人を超える来場者が有り、ほとんどの方が和船細工の魅力に取りつかれ、特に子供たちは1時間以上観覧する姿などが印象的であった。

⑯主催者：東海大学海洋科学博物館

入場者数：98,575人

<内訳>

①平成26年10月1日～平成27年2月28日：46,756人

②平成26年7月26日～8月31日：51,819人

成果：夏季においては例年来館者数を大きく上回ったが、秋冬期での来館者数が大きく落ち込み、全体としては前年度比89%にとどまってしまった。今回は一般の方が普段はいることができない研究所を「ようこそ！海の研Q所」として公開し、多数の標本をできるだけ触れて頂けるように重点を置き、様々な工作教室や、幼児用ゾーンなども設け、特に子供たちに楽しんで頂いた。また、海洋生物飼育系専門学校生や東海大学部生も運営・実施に加わり、解説員等としても参加頂いた。

⑰主催者：萩博物館

入場者数：20,922人

成 果：会期121日間の目標入場者数15,000人に対し、20,922人（目標の約140%、この時期の企画展示としては最多）の入場者があり、市内外より好評価を得ることができた。
市民講座3回を実施、ほぼ目標に達する約140名の参加者があった。地域学習出前講座・博物館授業、ギャラリートークを18回（対象のべ412人）実施した。萩博物館ホームページ（萩博ブログ）において、展示紹介と関連情報発信を23回にわたり行った。市民参加による資料調査・集積（漁具船具、漁場図、漁業記録）、資料制作（漁具）、資料展示（櫓大工道具）を行った。
課題として、萩市行事との調整が不十分であったことより、地域の海洋環境再発見のための現地探訪・研究施設における研修会を実施することができなかった。

⑱主催者：神奈川県立歴史博物館

入場者数：15,816人

成 果：戦後70年という節目の年であったこと、さらに他館、他組織との競合の少ない時期であったこと等から、多くの観覧者を得ることができた。また、有料入館者数の割合が高いことから、一般の関心の高さをうかがうことが出来た。
課題としては、一般観覧者が多かった反面、展覧会期が春季休業期間と重なっていたことからか小学～高校生の来館者は多くなかった。休業期間以前からの周知、広報が不足していたことが一因と考えられ、今後同時期での開催の際には、計画的な広報活動が求められる。

⑲主催者：公益財団法人 滋賀県文化財保護協会（滋賀立安土城考古博物館）

入場者数：40,611人

成 果：当初計画では、企画展を6回・12ヶ月間の開催で60,000人の来場者を見込んでいたが、企画展を4回・7ヶ月間開催して、40,611人の入場者であり、一日当たりでは見込みより多い入場者を得ることができた。そのため、海と結ばれた琵琶湖の歴史と文化を多くの人に伝えるとともに、日本の歴史のなかで海と琵琶湖が果たしてきた役割に対して理解を深める呼び水とすることができた。
講座は、受講者が少なかったものの、その動向からは、リピート率の低さが看取された。このことは、各講座の内容に対する受講者の関心を反映したものと捉えられるため、今後の講座のテーマ設定を行う上で有意義である。また、講座の後半部に展示見学を取り入れる試みを行ったが、実際の資料を見ながらその意味を解説したため、参加者の理解をより深めることができた。

⑳主催者：群馬県立自然史博物館

入場者数：36,316人

成 果：資料展示に留まらず、生き物たちの生息環境を直感的・体感的に感じることのできるインタラクティブな展示の演出、関連行事の開催により、展示の見学で得られる成果以上に来館者、参加者には生物の多様性から生命の不思議や尊さを学ぶ機会とすることができた。特に「海」に隣接しない地域の社会教育施設として、海洋生物の生態展示やハン

ズオン展示による効果で、海洋への関心や親しみを改めて感じてもらう機会となった。

課題等としては、会期中の入場者については、県内外からの団体客の利用は多かったものの、地域の秋祭りや運動会、悪天候などの影響もあり、目標とした入場者数に及ばなかった。

②①主 催 者：鈴鹿市（大黒屋光太夫記念館）

入場者数：1, 230人

成 果：展示動員数は前年比110%の1230人であるが、当初目標である1500人を下回り達成率82%となった。来館者アンケートによると、海外を含む遠方からの来館者が多く、来館動機ではチラシを見て来館された方が多かった。アンケート回答者の満足度は高く、無料で配布した図録も好評であった。今回の展示では、特にグラフィックで海流や漂流・漂着経路などを示すことが出来たため、来館者の理解につなげることができた。また、学芸員による展示解説会とは別に、係員による展示解説を随時行った。以上のことから概ね目標を達成できたと考える。

関連行事においては当初予定した参加者30名を大きく上回る合計117名にご参加いただくことができ、一定の成果を上げることができた。アンケートでは「自然とふれあっているようで優しい気持ちになりました」（6年生）などの感想があり、海のそばで暮らす子ども達が、あらためて海岸を歩き、素材を拾って作品を作り上げたことで、いつもとは違った視線で海や自分達が住む環境を感じる事が出来たのではないかと思う。

②②主 催 者：沖縄県立博物館・美術館

入場者数：10, 149人

<内訳>

①沖縄県立博物館・美術館：9, 586人

②恩納村博物館：563人

成 果：日本を代表し、今後のモデルケースとなる水中文化遺産展とすることができた。海洋教育の一貫としての水中文化遺産が持つ可能性を広く普及することができた。県内外多くの博物館、教育委員会、大学の専門家が視察され、今後の展開に関する協力関係を構築することができた。水中文化遺産への理解を深める（海洋教育）ために、様々な展示品や体験品を製作し、巡回可能なパックを製作することができた。展示会中に執筆し、掲載された水中文化遺産展の新聞記事を見て来館されたお客さんが、展示していた碇石を見て、自分の家にも似たようなものがあることに気づき、情報を提供していただき、新発見の碇石として展示に追加することができた。それが新聞記事に取り上げられ、それを読んだ離島の一般人から、さらに新しい碇石の情報が寄せられた。過去に北海道釧路の海底から引き揚げられ、保存処理も展示もされことなく漁港に保管され、劣化が進んでいたことが課題であった西欧タイプの鉄錨について、展示会を通して、その価値を認識した琉球大学の水中考古学研究所と松浦市が共同で預かり、保存処理・管理を行う事となった。

②③主 催 者：ミュージアムパーク茨城県自然博物館

入場者数：186,586人

成 果：本企画展の開催期間中の入館者数については200,000人という目標を設定したが、最終的な入館者数は186,586人（到達度93.3%）となり、目標を達成することはできなかった。また、前年度の同一期間の入場者数は189,587人、前々年度は184,734人であり、前年度を下回り、前々年度は上回る結果となった。開催期間中の入館者数は、ほぼ例年並みとなったが、今まで当館が行ってきた企画展からは少し視点を変え、茨城の豊かな自然だけでなくその自然と関わりながら育まれてきた郷土の産業や文化に焦点をあてたことで、普段はあまり当館には訪れない歴史や祭などの文化的な内容に興味を持つ来館者が多く訪れてくれた。

②④主 催 者：高槻市教育委員会（高槻市立今城塚古代歴史館）

入場者数：13,758人

成 果：日常生活のなかで接することの少ない「船」や「水運」について、本特別展では重要文化財をはじめとする貴重な資料をもとに、淀川に面した市域において古代から水運が重要な役割を担っていたことを広く周知する大変良い機会となった。玄関ホールの無料エリアに古代船の大きな復元模型を展示した事で、特別展の開催を知らずに来館した人にも展示や船に関する興味と関心を持って頂いた。最終的に、昨年度の秋季特別展（文化庁主催全国巡回展）を上回る来館者数となり、終始良質な啓発事業として展開できた。

②⑤主 催 者：公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団（横浜市歴史博物館）

入場者数：9,366人

成 果：佐久間象山没後150年を機会とし、当館所蔵の象山関係資料を公開するとともに、関連資料を一堂に会する特別展を行った。象山の海防論や彼の横浜開港論の意味、「海防」や「ペリー来航」「開港」といった海洋に関する事柄と地域との関係、松代藩による横浜応接場の警衛の様子や、妻宛の手紙から読み取れる象山の人間的な魅力などに迫ることができた。来場者は9,366人で、目標値11,000人の85%となった。ただし有料入場者は目標値の103%だった。図録は、目標値450冊のところ、402冊（89%）であったが、展示にあわせて独自に開発したオリジナル図録バッグの売り上げが223点となり、収入としては目標値とほぼ同じになった。また、今回は関連事業の参加者数が584人（書道展応募者116人を除く）となり、目標値450人を上回る（130%）ことができた。

②⑥主 催 者：宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）

入場者数：17,530人

成 果：海の日である7月21日（月・祝）を初日とし、夏休み期間に合わせての集客をはかった。実際、夏休み期間（7月21日～8月31日、開催日数38日間）で全体の約半数にあたる8,990人の観覧者を数えるなど十分な集客があり、開催時期は適切であったと言える。船は、人が海を越えていくための「小さな動く陸」であり、様々な社会的状況を表現するうえでの象徴となりやすい存在である。震災

によって被災した現在の社会状況は、まさしく運命共同体としての船と航海に例えることができる。震災からの復興という同じ課題を抱える気仙沼市で、航海や造船から見える精神性や社会性を学ぶことで、各々が復興へのヒントを導き出すことができたといえる。

②⑦主 催 者：公益財団法人帆船日本丸記念財団（横浜みなと博物館）

入場者数：13, 257人

成 果：マスコミ等の露出件数は目標のほぼ60件に達したが、入場者数は目標の6割ほどにとどまったのが残念であった。効果的な広報方法が課題として残った。しかし熱心な見学者も多く、「海国日本の発展と共に歩んだ歴史がまのあたりにみえるような気がします」「大栈橋の歴史を再認識」等の感想があった。企画展に合わせて、大さん橋の鉄螺旋杭による栈橋工法を解明する初めての動画を、土木の専門家(日大生産工学部教授)の協力を得て製作することができたのは、大きな収穫だった。また、今回は市民から大さん橋の思い出の写真等を募集し、市内外から55人の応募があった。修学旅行や移民船見送り、初めての海外旅行、客船見物、旅行会社客船部署の仕事など、大さん橋が持つ多面性を改めて感じた。

②⑧主 催 者：公益財団法人 日本科学技術振興財団（科学技術館）

入場者数：36, 000人

成 果：

・「海の生物の不思議や生命の素晴らしさを伝える」

生きる化石と呼ばれるシーラカンスの稚魚の標本や稀少な深海生物の生体・標本の展示、及び研究者による映像を交えたわかりやすく楽しい講座を通じて、海洋生物の不思議さや生命の素晴らしさをつたえることができた。

・「海が宇宙よりも謎が多く、私たちが生きていく上での大切なものであることを伝える」

展示や海洋科学の研究者らによる講座で、現在の研究でわかっている部分また未知である部分を紹介し、海洋の謎が研究者らの努力により徐々に解明されてきたと同時に未知の部分が多いことを伝えた。また、海洋資源が食料や医薬品として私たちの生活に重要な役割をもっていることを伝え、海洋資源と人間社会の密接な関係を伝えた。

・「海洋生物と私たちの生活の繋がりを伝える」

フグ、カブトガニ、クラゲ、テングサ、オゴノリ、ヨシキリザメ等さまざまな海洋生物を例にとり、海洋資源が食料や医薬品として私たちの生活になくしてはならないものであることを伝えた。また、食物網やプランクトンが海の環境と密接な関係にあることを紹介し、私たちの生活にも大きな影響があることを伝えた。

・「海洋への関心を高める」

生きる化石と呼ばれるシーラカンスの稚魚の標本や稀少な深海生物の生体及び標本の展示を通じて、海洋への関心を高めることができた。同時に開催した講座やワークショップは展示とリンクした内容となっており、海洋への興味関心を定着することに効果があった。

⑳主催者：鳥取県立博物館

入場者数：11,695人

成果：展覧会入館者数は11,695人（目標8000人）となり、目標を大きく上回る入館者数（目標の約145%）となった。来館者アンケート結果は72.5%が「大変良かった」、26.3%が「良かった」となり、入館者の高い満足度を示した。サンゴはサンゴ礁をはじめ深海や南極海など様々な海に生息している。それらのサンゴを紹介する前段として、それぞれの海洋がどのような海なのかを解説し、さらにそのような多様な物理的環境にサンゴがどのように適応しているのかなど、海洋の理解をサンゴの観点から理解できるような展示の工夫を行った。また、海洋をどのように調査するか知っていただくため、しんかい6500の模型や調査船模型、さらには流向流速計などの海洋調査機器にも焦点を当てた展示を試みた。鳥取地域で江戸時代から昭和初期まで隆盛した、山陰の深海サンゴを材料にした深海珊瑚細工について、地元の珊瑚細工職人の話や、地域の方の所有する珊瑚細工資料などを紹介し、地元の海洋について興味を持ってもらえるような展示づくりを行った。

㉑主催者：鹿児島県歴史資料センター黎明館

入場者数：3,869人

成果：遺跡出土の貿易陶磁器や国内産交易品、関連する文書資料や絵画資料など豊富な資料の展示によって、東シナ海を舞台とする中世日本の対外交易の展開を素描する有意義な展示とすることができた。中でも、11世紀後半から12世紀前半の南九州、琉球列島において、博多を窓口とする日宋貿易興隆を背景として、九州から琉球列島、さらに南部の先島諸島に至る交易ルートが形成され、海洋を舞台とした安定的なひと・もの・文化の交流が始まり、日本列島と琉球列島に共通の文化的基盤が育まれたことを紹介した。

㉒主催者：公益社団法人 桂浜水族館

入場者数：14,000人

成果：土佐湾の深海生物展は、学術的な展示のみならず、土佐湾で行われている深海魚漁業についても紹介を行った。このことにより、県内外から水産学的な視点からも土佐湾への理解を深めることができたと思われる。実来入場者数は目標入場者数15,000人をやや下回る約93%の14,000人であった。体験コーナーであるオオグソクムシのタッチングは、高知県では初の試みであり、入場者への深海生物の高い関心に繋がったと推察される。

㉓主催者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ（青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸）

入場者数：41,535人

成果：期間中の目標入場者数40,000人に対し、41,535人の入場者数であった。元乗組員が展示解説することで、専門的かつ充実した船内見学ができることにより青函連絡船の保存意義の理解を深めることができた。本企画展を開催することで、青森市民へ今後

の船体大規模改修への理解と意義を深めてもらう機会となった。青函連絡船の運航実務について、質的価値の高い実物資料を広く公開することで、学習機会の充実に資するものとなった。専門的になりがちな航海関係等の資料について、元青函連絡船乗組員がわかりやすく解説を加えることで、より関心を高めてもらった。

③主催者：特定非営利活動法人 語りつぐ青函連絡船の会（函館市青函連絡船記念館摩周丸）

入場者数：17,099人

<内訳>

①平成26年8月1日～8月31日：7,745人

②平成26年11月22日～平成27年3月31日：9,354人

成果：最新技術等を導入され運航した「青函連絡船」をテーマにすることで、青函連絡船ならではの視点から、当時の国内海運事業とともに青函連絡船の特異性と魅力を再認識していただく機会となった。「摩周丸非公開区画観覧システム」の設置により、この不満を大幅に解消することができた。そして、モニター越しではあるが車両甲板等を見てもらい、「海の上のルール」として本州－北海道間の大量輸送を支えた技術を実感してもらうことができた。パネル展示では、船橋、主機室、総括制御室等、航行・操船のための部屋、設備のほか、これも現在は直接見学することができない、普通船室、グリーン船室、寝台室、喫茶室、食堂等についても、写真と文で解説した。乗船経験のある人には懐かしく思い出していただき、乗ったことのない人には当時の連絡船の旅を想像してもらえたことと思う。

④主催者：公益財団法人名古屋みなと振興財団（名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ）

入場者数：31,849人

成果：会場が例年より広がったこと、会期を延長したこともあり、目標入館者数22,000人を上回る31,849人となった。ワークショップが好評であり、座席が足りなくなり追加することが度々あった。アンケートでは「ボトルシップ」「触れる2種類の氷」「パレオパラドキシア」の評判が良かった。地元の方には「デザイン博の展示が良かった。懐かしかった」との意見が多数あった。昔の船の艤装品は、船関係の職業の方から評判が良かった。

⑤主催者：名護博物館

入場者数：3,424人

成果：当館としては開催期間が長めだったこともあり、ここ数年のうちに開催した展示会で最も多い来場者数を記録した。企画展のテーマや展示内容に因るところが大きいのはもちろんだが、テレビ、ラジオ、新聞、インターネット等を活用した広報活動も功を奏したと思われる。なかでも、支援を活用したチラシ配布は宣伝効果が大きかったようだ。関係機関ほか、市内の全小中学生へチラシを配布したことで、児童生徒や家族連れの来場者が大半を占めたこともこれを支持

する結果となっている。来場者の展示に対する満足度は目標値を上回り、一定の評価を得ることができた。

③⑥主催者：指宿市（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）

入場者数：1, 280人

成果：企画展開催期間中の目標入場者数1, 200人に対して、1, 280人の入館があり、目標入館を達成できた。実物と模型の展示をできるだけ多く行うことで、海洋と火山の恵みに関する展示について来館者の視覚的理解を高めることができた。幅広い年齢層を対象とした企画展であるが、特に児童・生徒の理解度を高められるように、博士と男の子、女の子が語るような展示パネルを作成した。このことで、親子で一緒にパネルを見て、海洋と火山の恵みの交流について楽しく学んでいる様子が垣間見られた。また、指宿ジオパーク研究会と連携し、企画展で展示した海洋と火山、火山の恵みについてのフィールドワークを行った。現地で本物の見学を行うことで、海洋の理解を深めさせると同時に、さらに海洋について見学者本人が自発的に調べてみるなど、興味を持たせる機会とした。

③⑦主催者：神戸市立須磨海浜水族園

入場者数：34, 427人

成果：昨年度から実施した「須磨ドルフィンコースト」は社会実験として実施したが、今年度は敷地内（海面）で、本企画展を新たに盛り込みグレードアップして本格実施となった。海上に浮かぶ企画展は、須磨ドルフィンコースト会場に訪れた来場者に非常に好評で、来場者のほとんどが企画展会場（浮島）に訪れた。これまで、口頭で行っていた解説等は来場者の一部にしか届かなかったのが、企画展によりそのほとんどに解説できるものとなった。上記事項と共に、解説内容が大型パネル展示を使用することにより、これまでより深い内容を伝えることができた。来場者が企画展会場（浮島）を訪れること自体、ライフジャケットを着用し、浮棧橋を渡ることは冒険心を掻き立て、参加体験型の企画展として活用することができた。また、積極的な広告・広報活動を行い、広く効果的に情報発信ができたと考える。広報成果として、テレビ（報道含む）：36件、新聞：31件、雑誌（タブロイド）：50件、ラジオ：12件となった。

③⑧主催者：THE モンスター展 実行委員会

入場者数：117, 585人

成果：入館者数は12万人を見込んでいたところ、117, 585人の入場者数を得、わずかながら下回ったが、展示内容は申請書で目標に掲げていた生物の様々なサイズなどの多様性が海などの環境から影響を受けていること、生命進化の中で様々な巨大な生物が海をはじめとする各環境で繁栄・絶滅していたこと等を示すことができ、来館者に生物や環境を考える契機を提供できた。また、展示構成を海→空→陸とし各環境での絶滅種から現生種の標本を展示することにより、生物と環境の関わりを示すことができた。特にイントロダクションからメイン展示を「海」の生物展示とし、深海をはじめ

とする海洋の生物や様々な時代の海の生物、世界初公開を含む巨大な海の生物を数多く展示することで、海の生物の多様性を示すことができた。

③⑨主 催 者：京都大学総合博物館

入場者数：2, 6 5 1人

成 果：来場者達成度については前年度比の増加率で検討する。当初予定の目標を検討すると、前年度比2%の伸びが目標であった。実際の来場者数は前年度同一期間が2,198人であり、今年度来場者数を考えるに来場者数は約30%増であった。前年度も同一期間中に特別展が開催されていたことを考えると、この伸び率は非常に高いものであった。当初予定より会期は短縮したが、以上の点から、来場者目標について一定の達成がなされたと考えられる。「内陸部でも海についての理解を深められる展示」、「学校現場との連携」、「学校での学校博物館形式での展示開催」、「展示作成を通じた京大から現場へのノウハウの交流」、「マニュアル付きの報告冊子」を掲げて実施し、概ね目標を達成することができた。

④⑩主 催 者：国立大学法人神戸大学（神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館）

入場者数：8 7 6人

成 果：来館者数に関しては、例年に比べ事前の広報が徹底されていなかったため、目標に達しなかった。一方、ボランティア・スタッフの説明とともに、様々な時代の模型が展示されていることとで来館者にはその時代の海運の様子などがよく理解して頂けたようである。

④⑪主 催 者：柿ビカリア会（なぎビカリアミュージアム）

入場者数：2, 9 6 7人

成 果：企画展中は、昨年より約150名多い、3, 0 0 0人近い過去最多の来場者となり、多くの家族連れで賑わった。地域のボランティア、また岡山理科大学や林原自然科学博物館等の多くの方々の支援により、普段見ることのできないような化石、また、教授らによる分かりやすい講演会等によって、過去の海洋性動物の化石や、海の尊さを身近に感じてもらうことが出来たと思われる。課題としては、指導者の都合等により、講演会や化石のレプリカ作りが1日しかできなかったことで、今後は多くの関係者らと連携をとり、より多くの日程で記念公演等の実施を開催したい。

2. 企画展支援館の研修会の開催【中止】

本事業の抜本的な見直しに際してブランディングを実施する必要があり、ブランディング及び事業の抜本的見直しが終了しなければ、本研修会の開催意義が大きく損なわれることから開催を中止することとした。（事業変更承認済み）

3. 博物館ネットワークの構築、運用

インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」専用WEBサイトにおいて、事業内容と「海と船の企画展」募集関連情報の公開を行った。

また、事業の抜本的見直しに伴うブランディングによって「海の学び ミュージアムサポート」事業WEBページを新たに作成し、見直し後の本事業の趣旨や目的、新規サポートプログラム内容の告知や募集を行うと共に、決定したサポート事業を広く公開し、今後の社会教育における海洋教育実践事例アーカイブのための基盤を整備した。

(1) 「海と船の博物館ネットワーク」WEBサイト

①アクセス者数（ページビュー数）：1, 880人（3, 140ページビュー）

※集計期間：2014年3月1日～2015年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数：1.28ページ

<内訳>

・新規閲覧者：72.8%

・リピーター閲覧者：27.2%ページ

(2) 「海の学びミュージアムサポート」WEBサイト(2015年1月30日公開)

①アクセス者数（ページビュー数）：5, 194人（19, 526ページビュー）

※集計期間：2015年1月30日～2015年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数：2.82ページ

<内訳>

・新規閲覧者：75.8%

・リピーター閲覧者：24.2%

4. 事業の抜本的見直しに伴うブランディング【新規実施】

本事業の抜本的見直しを目的としたブランディングを行い、本事業の趣旨や目的、実施手段などについて、「社会教育における海洋教育の推進」の視点から調整を行い、平成27年度から事業名を新たに「海の学び ミュージアムサポート」として実施することとし、ロゴマークやWEBページも新たに作成した。（事業変更承認済み）

■ブランディング後の事業概要

(1) 事業名

海の学び ミュージアムサポート

(2) キャッチコピー

あなたの館ならではの活動に、資金を。情報を。ノウハウを。

(3) ステートメント：

海に囲まれた日本だから、海の大切さを学ぶ体験を日本中へ。

博物館、美術館、水族館をはじめ、

あらゆるミュージアムの活動を支援し、学びの場を広げていく。

それが「海の学び ミュージアムサポート」です。

あなたの館ならではの、
海の展示・事業・イベントなどをあらゆる角度からサポートします。
ミュージアムの数だけ、「海の学び」がある。
さあ、あなたの館でも、新しい活動を。

「海の学び」とは
本事業における海の学びとは、
「海洋教育」＝「海に親しみ、海を知り、海を守り、海を利用する学習を
推進する教育」の一環となる活動です。
社会教育の観点はもちろん、学校教育をも含め、
「海洋」に関する生涯学習の場を広げることを目指しています。
「海を守る」ことの大切さを学ぶ事で、毎日の中で海を意識して行動で
きる人と数多く育成し、次世代に豊かな海を引き継いでいきます。

- (4) サポートプログラム
- ①プログラム1 「海の企画展サポート」
 - ②プログラム2 「海の博物館活動サポート」
 - ③プログラム3 「海の学び調査・研究サポート」
 - ④プログラム4 「海の学びセミナー」 ※2016年度より実施予定

- (5) ロゴ

【Aパターン】



【Bパターン】



以上